

コメント (3) : 日本人植民者の戦後文学における 二重言語空間

——小林勝の植民地小説と朝鮮語——

原 佑介

1.

私は、いわゆる引揚者、とりわけ植民地朝鮮で生まれ育った日本人の文学に関心を持っています。この範疇に入る作家には、森崎和江〔1927-〕、梶山季之〔1930-1975〕、五木寛之〔1932-〕、後藤明生〔1932-1999〕などがあります。植民地朝鮮から戦後日本に植民地主義の問題を持ち帰る形となった彼らは、中西伊之助〔1887-1958〕ら植民地期に活躍した日本人作家たちの後継者であるといえます。また彼らの文学はある面で、金石範〔1925-〕らの戦後在日朝鮮人文学とコインの両面のような関係にあるともいえます。朝鮮植民者二世の戦後文学は、文学史的にそのような位置づけができるかと思われます。彼らの文学において植民地の言語空間はどのように表象されたのか——このことについて補足的にコメントをし、「大日本帝国植民地と文学の言語」という今日のテーマの広がりを確認しておきたいと思います。

金石範はあるエッセイの中で、日本語文学に携わる自らの複雑な言語主体の問題について次のように述べています。「日本語によるフィクションである以上は書く人間の国籍などは問題ではなく、朝鮮人であることを忘れるべきであり、少くとも度外視すべきだ」という後藤明生の主張を受けて、とのことです。

もちろんフィクションは想像力による自立した世界であって、それなりに普遍につながるものであるから、何語で書かれていようともそこに作家主体の国籍などは問題になりえない部分があるのはたしかだ。虚構のメカニズムにはそのような側面があるのを認めながらも、私はしかしどうもこのことばがひっかかってならなかった。とくに日本と朝鮮の関係を見るならば、日本語は単なる異国語だということだけではなく、そこに支配の爪痕をもったことばなのだ。しかも、母国語を失ってしまってその内部に朝鮮語の支柱をもちえないものには、いっそう日本語は絶対的な位置を独占することになる。それでもって小説を書く場合、ただ単にフィクションだといって、その機構に収めてしまいきれぬ、かなり屈折したものが生まれてくるようになるものだ¹⁾。

金石範をはじめとする戦後の在日朝鮮人文学者にとって、日本語に刻みこまれた「支配の爪痕」といかに向き合うかは、その根幹に関わる重大な問題でした。続けて金石範は次のように述べています。「日本語は、国土とともに国語を奪われた朝鮮の幼児の柔らかい脳髓を強姦したといっ

てよいものだ。在日朝鮮人にとってことばは空気のようにはじめから祝福されながら与えられたものではなかった。自らのことばを奪われた代りに、日本語が強制されたのである。そのような意味で日本語の侵略性は、そのことばを使う在日朝鮮人作家の心に倫理的な屈辱感を押しつける²⁾。」

性暴力の比喩が適切かどうかはさておき、少なくともそこに決定的な精神上の暴力があったことはまちがいありません。金石範のこの指摘は、戦後在日朝鮮人文学を考える上できわめて重要な問題を示唆しているように思われます。それは、日本語を用いる際の在日朝鮮人作家の「屈辱感」は日本語によってしか表現されえない、という強烈なアイロニーが存在するということであり、さらにいえば、在日朝鮮人文学の日本語の「支配の爪痕」は原理的に翻訳が不可能である、ということです。言語的民族主義から構造的に見捨てられているこの孤独にも、日本語を選択する在日朝鮮人作家の苦悩の深さがあるといえます。このことは、植民地文学における二重言語空間の描写の問題を考慮するならば、いっそう深刻でしょう。

戦後日本において金石範のいう日本語の「支配の爪痕」の問題に最も深く切りこんだ在日朝鮮人文学者のひとりに、詩人の金時鐘〔1929-〕がいます。彼は、金石範のいう「国土とともに国語を奪われた朝鮮の幼児の柔らかい脳髓」を根底的に日本語化された世代にあたります。その戦後文学の歩みは、「己を育んだ日本の途方もない愛」から切れるための苦痛に満ちた「自己葛藤」の過程でした³⁾。

金時鐘のこの歩みを象徴するものに、金素雲〔1908-1981〕による名訳の誉れ高い『乳色の雲』（『朝鮮詩集』）〔1940〕の再訳への挑戦があります。当時朝鮮語をまったく知らない内地の文壇から激賞されたこの訳詩集に、皇国臣民化した金時鐘少年は「身体が溶けちゃうくらい感動し」、本がポロポロになるほど読みふけます。「日本語で読む朝鮮の詩が日本の詩と情感の波動に何の違もないことにまず感動した」彼は、「ああ、うちの国の詩も日本の詩と同じなんだな。同じものを持ってるんだ」と感激したといいます——「つまり私自身が倒錯した日本人になっていたんです⁴⁾。」

この「倒錯した」感激からおおよそ60年の後、金時鐘は『朝鮮詩集』を6年がかりで再訳し、訳文と原文を並置した形で組んだ『再訳 朝鮮詩集』〔2007〕として出版しました。金時鐘はこの訳詩集のほかにも、大戦末期に内地で獄死した「悲命の民族詩人」尹東柱〔1917-1945〕の作品群から編訳した『尹東柱詩集 空と風と星と詩』〔2012〕も出版していますが、こちらも巻末に朝鮮語原詩が掲載されています⁵⁾。これらの訳詩集で金時鐘が見せた原詩掲載へのこだわり、そして原詩のニュアンスを最大限生かそうとする直訳調へのこだわりは、朝鮮語詩をめぐる金時鐘の一連の訳業の核心を成しているように思われます——すなわちこれらのこだわりは、植民地期に朝鮮の詩心を近代日本語によって噛み砕いて見事に流麗な日本語詩に変換してみせた金素雲、「まことに詩神は乞食に身をやつした王の如く、不可思議な場所に眠ることを愛したものである」⁶⁾と述べて『乳色の雲』を称賛した佐藤春夫をはじめ当時の内地の文士たち、さらにその日本語詩に魅了された皇国少年としての過去の自分自身を乗り越えようとする金時鐘の強固な意志の表れであったように思われます。

しかしながら、これらの訳詩集に掲載された朝鮮語の原詩には、どのくらいの読者があるのでしょうか。おそらく原詩への通路は、朝鮮語を解する在日朝鮮人「同胞」と朝鮮通のごく少数

の日本人に向けて開いておかれたものでしょう。しかし一般的にいて、朝鮮語にしるほかのどの言語——近代日本においては伝統的に大多数が英語・仏語・独語・露語など西洋言語でしょう——にしる、語学書の類でない限り、訳詩集に原文が載るケースはそれほど多くはありません。なぜなら、詩に限らずそもそも翻訳とは原文を解さない読者が多少なりとも言語の壁を越えて原文のメッセージに接近する手伝いをするものであって、その点に限っていえば原文掲載は本末転倒なことだからです。ましてや朝鮮語読者が非常に少ない日本語圏のことです。原文がどれほどの読者を得られるのか、その現状を金時鐘が知らないはずがありません。もちろん、この原文掲載を、「同胞」を愛する金時鐘の言語的民族主義の表現と見なすこともできるでしょう。しかしここには、それとは別に読みとるべきことがあるように思われます。今日のテーマに照らし合わせて考えるならば、これらの訳詩集における日本語訳文と朝鮮語原文の併存は、まさに在日朝鮮人日本語詩人金時鐘の内部における葛藤に満ちた二重言語空間が視覚的に現れたものとして受けとることはできないでしょうか。さらには、これらの訳詩集自体を、金時鐘の詩業、そして戦後在日朝鮮人日本語文学における日本語と朝鮮語の緊張関係を先鋭に表したのものとして受けとることはできないでしょうか。

金時鐘は、植民地支配の完成期にあたる自らの少年期の真実について、次のように打ち明けています。

私は昭和の初めの生まれでして、私の少年期は日本の植民地統治が完成された時期でした。だからといって私の記憶が暗いものではありません。暗黒時代といわれる植民地時代に成長したにもかかわらず、ほのかな香りまでも呼び起こしそうな彩りが、日本語による密やかな記憶として私の体内には抱えられてあるのです。そのことが、私には暗い、私の過去なのであります。

つらい歴史性の中で私の少年期は彩られてある。それなりにいい私の少年期だったのです。それは、呼び起こされる全てが日本語で作り上げられている世界です。ですから、幼少の折の今もって色あせない風土のために、いつまでたっても私は朝鮮から遠いのです⁷⁾。

日本語の喜びに彩られた「それなりにいい私の少年期」を乗り越えるため、金時鐘は戦後、朝鮮語を「壁に爪を立てる思いで」学び直します。しかし金石範らと同様、彼もまた結局その文学の言葉に、朝鮮語ではなく日本語を選びました。そして金素雲の『朝鮮詩集』を新たな日本語で更新しました。これを、彼における朝鮮語の敗北と見なすことは決してできません。むしろ私たちは、二重言語空間として立ち現れた彼の訳詩集そのものを、金時鐘、そして戦後在日朝鮮人日本語文学の葛藤とダイナミズムに満ちた言語的二重性の結晶として受けとるべきではないでしょうか。

2.

一方、朝鮮植民者二世の戦後文学においては、植民地朝鮮と戦後日本にまたがって生きた生の言語的二重性は、その根幹に関わるほど大きく影を落とすことはなかったといえるのではな

いかと思います。金時鐘は幾度も「壁に爪を立てる思いで」朝鮮語を学んだと打ち明けますが、生活空間としての朝鮮を離れた植民者二世にとって朝鮮語に向かう内的必然性が戦後いっそう希薄化したのは当然の成り行きでした。

以下で見ていく小林勝〔1927-1971〕もまた、人生最初の一六年間を朝鮮ですごしたにもかかわらず、ほかの大多数の植民者二世と同様、ほとんど朝鮮語を習得することはありませんでした。では、彼のようなモノリンガル作家による植民者文学——ほぼすべての植民者文学——にとって、植民地の二重言語空間をどうするのかという問題は無縁だったのでしょうか。確かに、小林勝のテキストには、ハングルは一文字も出てきません。これは基本的にどの朝鮮植民者二世作家のテキストにもいえることです。森崎和江〔1927-〕のテキストにごくまれにハングルが出てくるなど、わずかな例外はありますが、出てくるといっても数文字を超えることはまずありません。したがって、近代日本人の中で比較的最も植民地との関係が濃厚だったといえる植民者二世たちでさえも、モノリンガリズムに強固に束縛されていたという点の文学的貧困においては「内地人」と大差がなかった、というのが現実でしょう。その意味で、彼らの戦後文学もやはり「戦後日本文学」であり、「戦後日本語文学」ではありませんでした。

しかしながら、彼らの文学において、植民地における二重言語空間は、決して完全に無視されたわけではありませんでした。少なくとも小林勝には確実にそれが言えます。ここから、金石範とほぼ同世代であった小林勝の戦後文学において、植民地朝鮮の二重言語空間がどのように描かれたのか、そしてそれがどのような意義を持つといえるのかを、簡潔に見ていきたいと思えます。

金石範は小林勝の死後、「私はいま小林勝のいくつかの作品を読んで重苦しい感動で心が重い」と述べ、彼の文学を高く評価しました。しかしながら同時に金石範は、戦後日本において最も真摯に朝鮮と向き合った作家だといえる小林勝において露呈した、戦後日本文学の宿命的な欠陥を見逃しませんでした。小林勝がその文学作品の中で、「倭奴（일본놈／ウェノム。日本人を貶めて言う、英語の Jap などに類似する語。ただしこの漢字は日本語的な当て字である）」を「이놈／イノム（こいつ、この野郎）」と誤って読んでいたことを批判して、金石範は敢えて次のように指摘しています——「小林勝にして、『倭奴』を『いのむ』としか表現できなかった。つまり彼も自ら認めるように植民者の子なのである⁸⁾。」

このように、基礎的な朝鮮語——罵り言葉を基礎的な語彙にとりあえず含めるとして——さえまともに理解していなかった小林勝ですが、その植民地小説では、逆説的にも、このわからなさ、朝鮮にしながら植民者が朝鮮語を理解できないという事実そのものが、重要な効果をもたらす結果となりました。

植民地朝鮮において、強制的な教育や生きていくための必要によって、多くの朝鮮人の子供たちはバイリンガル化していきました。これに対して、小林勝を含む日本人の子供たちには、朝鮮語を習得する必然的なモチベーションはまずなく、わずかな例外を除いてバイリンガル化した者は皆無でした。彼らは基本的に日本人街で生活を営み、そのエリアに進入してくる乳母などの朝鮮人とのコミュニケーションにおいても、彼らが日本語を用いてくれるために、朝鮮語は必要なかったのです。植民地期に言語活動を根本的に日本語化されたという金時鐘が、朝鮮の解放後「それこそ壁に爪を立てる思いで、『朝鮮語』をイロハから覚えはじめた」と打ち明

けていますが⁹⁾、この執念に比肩しうるだけの熱情をもって戦後日本で朝鮮語と向き合った植民者二世は、限りなくゼロに近かったでしょう。

このようなモノリンガル状況を生きた小林勝ですが、彼は植民地朝鮮での植民者たちの生活を描く際、彼らが囚われていたモノリンガル状況の檻を描き出すことに挑戦しました。このことは、植民地において日本語のモノリンガル状況にあることが異常な状態であるという認識を得ることによってはじめて可能となります。植民者が植民地の二重言語空間に放りこまれ、自身が構造的に抱えている朝鮮語のわからなさに気づくことによって、自身が植民地に存在することの不当性を突きつけられる——そのような過程を描く植民地小説の可能性を、小林勝は開こうとしたのです。

小林勝の初期の代表作「フォード・一九二七年」〔1956〕では、日本人街を離れて朝鮮語世界に迷いこんだ植民者二世の少年が直面する孤立感と苛立ち、そして気後れがテーマになっています。この作品は、「大日本帝国植民地と文学の言語」という今日のテーマに基づいて読み直すとたちまち新しい姿で立ち現れてくる植民者文学の好例だといえます。

朝鮮の田舎町に住む日本人の少年が、自分たちと違い日朝両言語を操って植民地におけるバイリンガル状況を誠実に生きている「トルコ人」に誘われて、ある日彼の一家が住む山上の洋館を訪ねます。朝鮮人の大人たちが集まっている館の前に砂場があり、そこで少年は、「トルコ人」の幼い娘と朝鮮人の子供たちが遊んでいるのを目撃します。幼女に日本語で話しかけるものの、彼女には日本語が通じません。苦肉の策として、「君の家に自動車があるだろうか?」と、乏しい朝鮮語の知識を総動員して話しかけた日本人少年に、金髪の幼女は鮮やかに「チャドンチャ・イッソ! (自動車, あるわ)」¹⁰⁾と答えます(このように、ここで小林勝は朝鮮語を片仮名で表記し、()を用いて日本語訳を施しています)。しかしそれ以上の朝鮮語によるコミュニケーションは、少年には不可能でした。そこでようやく少年は、仲良く遊んでいた「トルコ人」の幼女と朝鮮人の子供たちが朝鮮語でコミュニケーションをとっていたということに気づきます。日本のものだと思こんでいた朝鮮に、支配者である自分が参入できないコミュニケーション領域が存在し、自分と同じ「外国人」である「トルコ人」が自由にその領域にアクセスしているということを知り、少年は自尊心を傷つけられて苛立つとともに、奇妙な気後れを覚えるのです。

「その時、ぼくは、山の下の小っぼけな町の中でこそ朝鮮人を馬鹿にして暮しているが、しかし、この山の中では、ぼくと姉は、自動車と汽車という単語二つよりほかに何の居場処もない、遠い外国へ来てしまったような気がしたのである。そしてその外国の主人公は三人の朝鮮の子供であり金髪のトルコ娘だった¹¹⁾」——少年にとってそれは、自分たち日本人が途端に無力化する領域が、自分たちを包囲するかのよう茫洋と広がっているということを悟らされる奇妙におそろしい体験でした。物語の最後で、言語的境界線を器用に行き来する「トルコ人」一家は、戦争の激化によっていっそうモノリンガル性に執着するようになった植民者たちによって追放されてしまいます。

金石範はまた、植民者二世たちは朝鮮が日本の一部であることを信じて疑わなかった、と小林勝が回想している彼のある植民地小説の文章に言及しながら、植民地所有の論理を人工的に作り上げる必要のあった植民者一世と、それを内面化して育った二世の違いを指摘しています。

しかし〔……〕日本人一世の場合はそう単純ではない。植民地の異民族に対する恐怖と裏腹に持ち続けた“罪”意識があって、自然な形でここが日本だという感覚は生まれない。だから、より意識的に自分の生活感覚を越えたところで、ここが日本だという所有の論理が作りあげられねばならなかった。つまり朝鮮が日本のものだという意識のことをいうのだが、それが日本人二世たちには形を変えて何の違和感もなしに生活感覚にまで浸透し、朝鮮で生まれていながら、ここが日本だと思って疑わなかったのである¹²⁾。

植民者二世のひとりとして実際に「所有の論理」を内面化していた小林勝は、戦後その文学作品の中でどのようにその論理を解除しようとしたのでしょうか。彼の文学にはその苦闘の足跡が様々な刻みこまれています。そこで大きな役割を担ったもののひとつが、まさに植民地における二重言語空間への眼差しでした。先に見たように、「フォード・一九二七年」において、「トルコ人」を外国人扱いしていた自分たち日本人もまた、実は朝鮮においてまぎれもない外国人であるという重大な事実を、朝鮮語世界のただ中に放りこまれた少年は突きつけられます。その時の「虚脱感」を、少年はこう吐露します——「ぼくは自分が何か特別な部外者であることを漠然と感じつづけていたのだった」¹³⁾。

小林勝は、植民者の朝鮮語世界からの疎外状況を描き出すことによって、支配者の強固なモノリナル幻想の上に構築されていた植民地「所有の論理」を突き崩そうとしたのです。

3.

では、小林勝の文学において、「所有の論理」が崩壊した後の植民地で、植民者を待ち受けていた光景とは、どのようなものだったのでしょうか。

晩年の秀作「万歳・明治五十二年」〔1969〕では、「フォード・一九二七年」においてかろうじて維持されていた植民者の優位が完全に覆され、朝鮮の真の主人が誰であるのかが、二重言語空間のただ中で、まさに言語によって植民者の胸元に突きつけられます。

この小説は、1919年の「万歳事件」の騒乱に巻きこまれ、意に反して朝鮮人を射殺してしまった植民者一世の男の精神的苦悩の物語です。内地の郷里に嫌気がさして出奔し、一旗揚げの夢を見て朝鮮にやってきた青年大村は、田舎町の朝鮮人実業学校の書記という地味な職に落ち着いてしまった不遇をかこちながらも、ある種の日本人たちとちがってそれなりに朝鮮人たちとも穏便な関係を保って暮らしていました。町に根を下ろすつもりで全財産を持ってやってきた植民者たちと異なり、根なし草を自認する彼には、その町、そして朝鮮を所有しているという意識は、少なくとも主観的にはありませんでした。その彼が「万歳事件」の狂乱状態の中で迫りくる群衆に向かって恐怖のあまり無意識に発砲し、勤務校の生徒を含む数人の朝鮮人を殺害してしまいます。

殺人に手を染めた後、もはや猟銃を手放せなくなった主人公の大村は、ある日朝鮮人集落の中にあるなじみの中華料理屋を訪ねます。そこで、かつてはたどたどしい日本語で自分と接していた朝鮮人生徒たちと再会します。常日頃生活の中で朝鮮語を耳にしていたにちががなく、朝鮮人を殺すまではそのことを特に気にも留めなかった植民者が、そこで改めて朝鮮語のわか

らなさに直面し、恐れおののきます。

突然、皿にかがみこんでいる彼の背後で、二人の朝鮮人が喋り出した。その聞きなれない異国の言葉は彼の心を荒々しくかき乱した。すると、三人の学生が烈しい口調で何やら喋りだした。それもまた朝鮮語であり、彼は完全に朝鮮語の渦の中に置かれた。洛東江の流れに身をまかせて下っていった時の金容泰の舌たらずの日本語はどこにもなく、あの日の金容泰の姿は消え失せ、朝鮮語を喋る朝鮮人がそこに居た。それは金容泰をはじめ、郷里にいた頃にくらべたならば多少は具体的現実的に理解することが出来ると大村が考えていた、その朝鮮人学生たちではなかった。一切の理解を拒絶した、正体不明の、薄気味悪い外国人がそこにおり、そして彼をとりまいて、理解できない言葉で喋っていた。恐怖が大村の全身を襲った¹⁴⁾。

朝鮮語に耳をそばだてる、しかし何を言っているのか全然わからない、そしてその意味内容以前に、朝鮮語がわからないことそれ自体がこの上なくおそろしい——ここに至って、初期の「フォード・一九二七年」では日本人少年を苛立たせるにとどまっていた朝鮮語のわからなさが、植民者が植民地を追放されるべき決定的な根拠として明示されるのです。

自らを包囲するかのようにならに次々に発せられる朝鮮語の波と朝鮮人たちの冷たい眼差しに耐えかねて中華料理屋から逃げ出した大村は、必死に平静を装いながら、大通りに向かって朝鮮人集落の路地を歩きます。その途中、「低いのはっきりした日本語」〔傍点原文〕を、あたかも銃弾を受けるかのように背中に浴びせられます——「ヒトゴロシ！」¹⁵⁾

このように、大村に浴びせられる決定的な呪詛の言葉は、日本語で発せられます。その言葉を放った朝鮮人が、朝鮮語の「人殺し！」は、大村には、そして作者の小林勝には聞きとれないということを知っているからです。これは、自分を実際に損ない得る朝鮮人の害意さえも、日本人は日本語に変換してもらってしか感知することができない、という幼見的無力さのうちに植民者が陥っていることを物語っています。さらにこれは、中華料理屋での理解不能の朝鮮語の嵐——理解できない以上、それは大村とはまったく関係のないただの世間話だったかもしれない——の内容が日本語の「ヒトゴロシ！」に集約されるものであった、と受けとらずにはいられない植民者の追いつめられた自意識を示しているのです。

この「万歳・明治五十二年」の結末は、フランス人アルジェリア入植者 (ピエ・ノワール) 四世であったアルベール・カミュが晩年に書いた短編小説「客」の最後の場面を彷彿とさせます。アルジェリアの辺境の学校に住むピエ・ノワールの教師ダリュもまた、状況的にやむを得ず一人のアラブ人を警察署に連行するはめになり、意に反して植民地支配の片棒を担ぐ形になってしまいます。ダリュはなんとかしてアラブ人を逃そうとしますが、彼は自らの意志で決然と「牢獄への道」を黙々と歩いていきます。作者のカミュは、130年におよぶフランスによるアルジェリア植民地支配の破綻の過程に立ち会う中で、出生地追放の危機にさらされている自らの孤独を託すかのように、学校に戻ったダリュを待ち受けていたものについて次のように書き、この小説を締めくくります。

しばらく経って、教室の窓べに突立ったまま、教師は、高原の縁一面に、黄色の光が空からさっと躍り出るのを、見るとはなしに眺めていた。彼の背後の黒板には、フランスの大河のうなりくねりの間に、下手くそな筆蹟の、白墨で書かれた文字がならんでいた。それはこう読まれた。「お前は己の兄弟を引き渡した。必ず報いがあるぞ」ダリュは空を眺め、高原を眺め、さらに、そのかなた海までのびている目に見えぬ土地を眺めていた。これほど愛していたこの広い国に、彼はひとりぼっちでいた¹⁶⁾。

黒板に書き殴られた呪いの言葉は、何語だったのでしょうか。引用文のとおり、テキスト自体には明示されていません。しかし、「下手くそな筆蹟」という語をやや弱い状況証拠として持ち出すまでもなく、これはおそらくフランス語ではなかったのでしょうか。大村の背中を撃った「ヒトゴロシ！」が日本語であったように、ここでダリュに向けられた脅迫は、宗主国の言語でなされたと言ふべきではないのでしょうか。こちらの言語に疎い者に向けた呪詛を最も効果的に突き刺すために相手の母語を用いるのは、植民地被支配者ならずとも自然な心理であるように思われます。

小林勝やカミュの植民地小説に見られるとおり、植民地における宗主国言語と植民地言語の緊張関係は、植民者文学において、植民地追放の危機にさらされた植民者の恐怖や不安、孤独を描くための重要なモチーフのひとつとなっています。フランス文学研究者の渡邊一民は、小林勝とカミュがともに、「旧宗主国の知識人が旧植民地の人々と連帯しようところみで挫折する物語」を書いていることに注目し、次のように述べています。「わたしたちはそこに、戦後の国際的な植民地戦争の時代における、先進国の知識人に共通して課せられた大きな問題のひとつを読みとらなければならぬだろう¹⁷⁾。」

小林勝は、出生地朝鮮への愛と贖罪意識のゆえに、朝鮮戦争当時、ひとりの共産黨員として「火焰鬨闘争」に関わって逮捕されています。1948年の入党以来1971年の死に至るまで共産主義者を名乗り続けた小林勝の戦後日本における後半生は、戦後日本の左翼運動の勃興と隆盛、そして幻滅と没落のひとつのサイクルとおおむね一致しています。朝鮮植民者二世であった小林勝にとって、それは何よりも、朝鮮人との連帯と共闘、和解の模索であり、それらが挫折していく過程でした。その中で彼が書いていった植民地小説には、今回お話ししたもの以外にも二重言語空間が様々な形で描かれています。日本人植民者の戦後文学における二重言語空間の問題は、戦後日本文学と植民地主義をより総合的に考察していく上で今後の重要な研究課題であるといえるでしょう。

注

- 1) 金石範『新編「在日」の思想』（講談社文芸文庫、2001年）130-131頁
- 2) 金石範同書、132-133頁
- 3) 金時鐘『わが生と詩』（岩波書店、2004年）10頁
- 4) 金時鐘同書、63-64頁
- 5) 金時鐘編訳『尹東柱詩集 空と風と星と詩』（岩波文庫、2012年）105-147頁
- 6) 金素雲編訳『朝鮮詩集』（岩波文庫、1954年）227頁
- 7) 金時鐘『わが生と詩』27-28頁

8) 金石範『『懐しさ』を拒否するもの』『小林勝作品集』5巻(白川書院, 1976年)379頁。

ただし, これは小林勝の朝鮮語の無知ではなく, 単に日本語の発音表記体系の限界を示すものにすぎない可能性がないわけではない。たとえば, 幼少年期を植民地朝鮮ですごした日本人作家湯浅克衛〔1910-1982〕の代表作「カンナニ」〔1935〕は, 多くの朝鮮語の発話を日本語ルビを活用して表現した小説であるが, その中にも「倭奴^{イノム}」という表記が登場する。〔『コレクション戦争と文学』17巻(集英社, 2012年)245頁〕

9) 金時鐘『わが生と詩』35頁

10) 小林勝『小林勝作品集』1巻(白川書院, 1975年)23頁

11) 小林勝同書, 23-24頁

12) 金石範『新編「在日」の思想』65頁

13) 『小林勝作品集』1巻, 25頁

14) 『小林勝作品集』5巻(白川書院, 1976年)179-180頁

15) 小林勝同書, 181頁

16) アルベール・カミュ「客」『カミュ全集』10巻(新潮社, 1973年)65-66頁

17) 渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮』(岩波書店, 2003年)177-178頁

